

(様式第1号)

令和5年度第1回文化推進審議会 会議録

日 時	令和5年8月18日(金) 10:00~11:00
場 所	市役所本庁北館4階 教育委員会室
出席者	会 長 加藤 義夫 委 員 平井 章一 委 員 枝元 益祐 委 員 岡 泰正 委 員 西本 望 委 員 桑田 敬司 委 員 ウイルソン 恵 委 員 藤田 美代子 委 員 田嶋 修
事務局	上田企画部長、柏原政策推進課長、井村政策推進課係長、正好政策推進課員
関係課	木野市民センター長、鈴木図書館長、竹村生涯学習課係長
会議の公開	■ 公 開
傍聴者数	0 人

1 会議次第

- (1) 開会
- (2) 議題1 令和5年度芦屋市文化推進基本計画評価報告書について
議題2 その他

2 提出資料

- (1) 資料1 令和5年度文化推進基本計画評価報告書

3 審議経過

<井村政策推進課係長より概要・資料1説明>

(加藤会長)

ありがとうございます。では、委員のご意見をお聞きしたいと思います。今のご説明について何かご意見はございますでしょうか。

(枝元委員)

先ほどご説明いただいた給食のお話ですが、書籍「あしやの給食」はどこで購入できますか。また、もう少し具体的に給食の取組を教えていただきたいのですが、例えば家庭に対するアプローチはあるのでしょうか。大阪の枚方市ですと、学校給食の献立表が地域のスーパーに流れており、お母さんたちが夜ご飯を考える時に学校給食とメニューが被らないようにするという取組がされています。このような取組は関東では、都心部ではなく、周辺のベッドタウンで実施されている取組で、非常に面白いと思っていました。先ほどの書籍についても、こうした取組と同様、家庭の声に対するアプローチといった意図もあるのでしょうか。

(井村政策推進課係長)

本市の給食は、全国的にも高く評価されており、ご家庭へのアプローチとしては、市ホームページで献立等を公開しております。また、過去には、広報「あしや」にて給食の献立のレシピを毎月掲載し、それを小冊子にまとめるといった取組もしておりました。大変ありがたいことに、芦屋の給食は保護者の方からも大変好評で、こうした経緯もあり献立の書籍を作らせていただくことになりました。写真の撮り方なども凝ったものになっており、評判をいただいております。書籍につきましては、市役所の売店等において購入することができます。

また、芦屋の給食は映画にもなっております。これは市制施行80周年を記念して作られたものですが、本年1月11日にDVDが発売されておりますので、機会がございましたらご覧いただければと思います。映画という媒体によって芦屋市の良さを全国、そして世界へ発信することができることから、映画化をさせていただき、シティプロモーションを実施しているところです。

なお、2021年には全国学校給食甲子園で、本市の給食が女子栄養大学特別賞を受賞した実績もございます。本市の歴史ある、自校調理にこだわった給食は、市の大きな強みだと感じておりますので、委員のおっしゃっていただいたように発信の仕方については今後も工夫を重ねていきたいと思っております。

(枝元委員)

メニューは学校ごとですか、それとも市で一括ですか。

(柏原政策推進課長)

各校に栄養士が配置されており、それぞれの学校ごとにメニューは異なります。センター方式ですと、どこの学校に行っても同じ給食ということになりますので、献立をスーパーに掲載しておられるのかもしれませんが、本市は全ての小・中学校でそれぞれメニューを組んでおりますので、献立を置くとなると11校分のメニュー表を置くことになる可能性もございます。一般的には、栄養士を1人配置して栄養バランスを考えた上で全校統一の献立を作成していると思うのですが、本市は各校に1人ずつ栄養士を配置し、月に1回程度「栄養士の会」を開催・協議をしながら、262円や303円といった限られた給食費の中で、工夫を凝らしながら作っています。最近では物価高騰もあり、材料費が高くなっていますが、創意工夫の上、マヨネーズやドレッシングなどの調味料も全て手作りで行っており、本当に高い評価をいただいております。他市から転入されてきた方からも、給食のクオリティーが高いとのお声もいただいております。これは大変自慢できることだと思っております。

(枝元委員)

分かりました。ありがとうございます。

(岡委員)

先ほどの事務局からの説明を聞いて一番上手だと思ったのは、打出教育文化センターの使い方ですね。シェアキッチンでの「絵本やアニメの再現料理」というところについて教えていただきたいのですが、再現する絵本やアニメというのは、芦屋に特化したものではなく、全国的・世界的なものを題材にするということでしょうか。

(井村政策推進課係長)

武庫川女子大学の提案書中の「シェアキッチンにおける絵本やアニメの再現料理」につきましては、現状では活用案の1つとして記載しております。実際の具体的な活用になりますと今後ということになりますので、現時点では、まだ未定です。

(岡委員)

美術博物館や図書館では、IPMや虫などの問題があって、料理や食事はできません。ですので、こうした施設において、例えば、ジブリの料理を再現する形であれば全国規模の話ですし、応募者もすごく多いだろうと思います。もしくは芦屋に特化した絵本があれば、それを再現し、図書館と食事をリンクさせることで、その作家についてもっと知っていただくきっかけにすることもできます。キッチンが整備されるということは大変興味深く、意味のあることだと思っています。給食などともリンクさせることもできるだろうと思いました。

ただの勉強ではなく、学びながら楽しく食事もできるという、うまくやればすごくいい試みだと思います。芦屋に郷土料理みたいなものがあるのであれば、それを活用してもいいのではと思いますし、庭のイベントなど、いろんな形で立ち上げていける試みだと思います。

(加藤会長)

ありがとうございます。食文化は全人類に通じるものですので、素敵な試みだと思います。

(岡委員)

芦屋の郷土料理や地場産業的なものはあるのでしょうか。そういうものではなく、もっとグローバルなものが芦屋の強みという話になるのでしょうか。

(井村政策推進課係長)

郷土料理とは違いますが、本市に関連する食べ物としては阪神間モダニズム文化に関連した「モダニズムカレー」という商品を市民団体の方々が売り出していました。

(桑田委員)

補足しますと、芦屋観光協会が主導になって、婦人会などを立ち上げられた廣瀬忠子さんの監修の下に、芦屋のマダムたちがお客さんをおもてなしするときに昔振る舞っていたカレーパーティーのカレーを再現したレトルトカレーを以前販売しておりました。特色はたくさんのトッピングを小鉢で用意して、みなさん思い思いに好きな副菜をカレーにトッピングするという立食パーティーのイメージで創り上げたものです。芦屋の名産にしようと生産したのですが、生産ロットや販売の関係で、今は販売を中止しています。5、6年前までは実施していました。

(加藤会長)

平井副会長は、以前、阪神間モダニズムについて関わられておられた際に、何か芦屋に関係するようなことや気になることはありましたか。

(平井副会長)

展覧会でしたので食文化まではフォローしておりませんでした。生活文化で食べ物のお話が出てきます。

(岡委員)

先ほど給食という話がありましたので、それを掘り下げられる特色や阪神間の中でも尼崎とも違う、神戸とも違う何かがあれば、絵本やアニメの話にもつながるのかなと思いました。

(加藤会長)

調査すれば出てくるかもしれません。現代のいわゆる芦屋らしさの食文化みたいな食べ物があるのではないかと思います。

(西本委員)

今の話に関する質問です。ほかの自治体では、地産地消の取組をされておられますが、芦屋市では海や山のものの特産品などありますでしょうか。

(井村政策推進課係長)

地産地消の観点で申し上げますと、全て芦屋で生産したものということは難しいのですが、給食にはできる限り県産品を使用しており、生産地を紹介しながら提供するといった取組を食育の一環として栄養士が主導となり行っています。

(加藤会長)

本日の議題は以上です。事務局から連絡事項はございますでしょうか。

(柏原政策推進課長)

次回の開催につきまして、昨年度までは年に1回程度の開催でございましたが、ちょうど次期文化推進基本計画の策定に向けて取組を進めるタイミングになりますので、今年度につきましては、来年2月ないし3月頃の開催を予定しております。次回の議題につきましては、アンケート結果の詳細のご報告と、次期文化推進基本計画についての協議をお願いする予定です。

次期計画の方向性も含めてご協議させていただければと思っておりますので、どうぞよろしく願いいたします。

最後に企画部長よりご挨拶をさせていただきます。

(上田企画部長)

皆さま、芦屋市文化推進審議会委員につき、ご承諾いただき、誠にありがとうございます。また、本日はご多忙中、ご出席いただき、重ねて感謝申し上げます。

皆さまから「芦屋の文化とは何だろう」、「芦屋の文化の状況がよく分からない」というご意見が上がるのではないかと感じておりましたが、やはりそのようなご意見をいただきました。

市長が就任当初から申し上げておられますのが、芦屋の市民力は非常に高いということです。私も長年市役所に勤めておりますが、同じように感じ取っているところです。3年以上のコロナ禍の中、行動制限もあり、生活に影を落とすということもございましたが、そうした中でキーワードとして、「安心」、「元気」、「勇氣」が色々な場面で出ていました。それが一つの文化ではないだろうかと思えます。芦屋の文化とは何だろうかと私自身も考えたことがありますが、市民の方々の「心身ともに落ち着いた生活をこの芦屋で送りたい、送って欲しい」

というこれまでの思いの蓄積によって、景観なども全部含み置いた上で今の芦屋の風土が作り上げられたとっております。どちらかというと、「広めたい」や「もっと知って欲しい」といった文化というより、芦屋の文化は日常に根づいた生活文化的なところで発生しているような気がしてなりません。今般のコロナ禍での経験も踏まえまして、改めてその大切さを感じているところです。

国の文化芸術推進基本計画が令和5年3月に改定されておりますけれども、委員の皆さまの任期であるこの2年間で、国を挙げて大阪万博を契機として日本の文化を広げていく動きが加速化されると思います。芦屋市民にとっては、観光客を呼び寄せたいとか、他県から来られる方にぎわいたいという思いより、住み慣れた地で自分の生活の質を高めていきたいという思いがある中で、芦屋はどういう立ち位置で今後進めていったらいいのか、また先ほど申し上げた芦屋の生活文化の質をどう高めていくかということが課題になってきます。また、IT技術等を駆使した若い世代の新たな文化の創造についても、今後文化を継承していく中で取り組んでいかなければいけないとっております。これらに関しては、特に委員の皆様方のご意見とお力添えが必要であると思っておりますので、今後とも何とぞよろしくお願い申し上げます。

(柏原政策推進課長)

事務局からは以上となります。

(加藤会長)

以上をもちまして、本日の会議を閉会いたします。皆様お疲れさまでした。